

13・J1・A

国語

注意事項

1. 「開始」の合図^{あいず}があるまで、問題を開いてはいけません。
2. 問題文は3枚、解答用紙は4枚あります。
3. テストの内容に関する質問は一切できません。
4. 気分が悪くなったとき、筆記用具を床に落としたときなどは、手を挙げて監督者^{かんとくしや}に合図^{あいず}してください。
5. 「終了」の合図^{あいず}があったら、すぐに筆記用具を置いて、監督者^{かんとくしや}の指示にしたがってください。

受験番号

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

秀一がはじめて「3」というせいせきを通信簿につけてきたのは三年生のときだった。そのとき、母はびっくりして、顔つきをかえて、学校へすつとんでいつてしまった。その年の夏休みは秀一にとっては地獄のような夏休みだった。ところが、そのために、秀一はすっかり勉強がいやになってしまった。それでも学校へいったのは、うちにいて母にしごかれるよりは、よっぽど楽だと思ったからである。

そして、そういう母のところへ、こんどは、「2」を持ってかえらなければならないのである。

② 秀一の足は、まるで鉛のくつでもはかされたようにおもったるかった。まぶしいほど明るいはずの初夏の空が、どす黒いふかいあなほこみたいに思えてくるのである。

(中略)

こうして秀一はおそろしい夏休みをむかえることになった。夏休み学習帳のほかに、ドリル、グリップ、ワークブック……とにかくうんざりするほどの問題集が、どかつと秀一のまえへつまれた。母がわざわざ書店にたのんでおいたものである。

「なにをやらせても満足にできないというのが、あなたのわるいくせよ。これだけあるんだから、一さつぐらいは満足にやつてもらいますよ」

母がじろりと見ていった。このおそろしいじょうたいからぬけだすには、ただひとつしか方法がなかった。

——でもなあ、おれはなんでも満足にできない男らしいからなあ……

秀一はその計画についていろいろ考えをめぐらせた。

ところで、まだ実行にうつす気のない計画などというものは、むやみやたらに人にいうものではない。できるかどうかともわからないうちに、えらそうにいつて、あとでできなかったら、いいわらいものになってしまう。それなのに、秀一は自分から、つい a、その計画をしゃべってしまうはめになった。

その朝、秀一は母にきびしくいわれて、問題集とにらめっこしていた。学校のじゅぎょうなら、ぼけつとしていても、時間がくればベルが鳴ってかんべんしてもらえる。ところが家のばあいはそのはいかない。それに休み時間もない。「ここまでやりなさい」ときめられてしまったらさいご、それがすまないうちは、ぜつたいにゆるしてもらえない。

——これじゃあ、なんのための夏休みだか、わかったもんじゃねえや！——

そんなことを考えているうちに、秀一は知らず知らずのうちに、つくえへつつぶして、ねこんでしまったのである。いやいやながらやっているせいかもしれない。

そのむかいあわせで、マユミも教科書をひろげていたが、秀一がねむってしまったのを見ても、おこさなかった。

b、おこしてやつても、よろこばれないことはわかっていたし、秀一がねていてくれるほうが静かで勉強しやすいからだ。なまじマユミがのうりつをあげたりすると、秀一は、ゴムバンドでねらい撃ちをしたり、鼻くそをぶついたり、つまらないじゃまをするだけなのだ。それに秀一が勉強のさいちゅうにいねむりをするのは、いつものことなのだ。

秀一は静かにね息をたてていた。そんなところへ母がはいってきたのである。母は腹をたて、らんぼうに秀一をゆすった。はずみで秀一はいすからころげおちた。

秀一はびっくりして目をさました。マユミがにやにやしながら見おろしていた。秀一は c、マユミのしわざだと思った。

「やりあがつたな！」

秀一はとびおきると、いきなりマユミのあんである長いかみの毛をつかんだ。 d、うしろから母の声である。

「秀一！」

「ゲエッ！」

「なにしてるんです！」

「だって、ぼくがなんにもしないのに、マユミがいすからつきおとしたん……」

「なにいつてんの！ わたしがおこそうとしたら、おちたんじゃないの。勉強のさいちゅうにいねむりするなんて、気のゆるんでいる証拠だわ。夏休みはただのおやすみじゃないのよ！」

——^④どうして、おれはこうまぬけにできてるのかなあ——

秀一はわれながら、なさけなくなってしまう。

「ほんとうに、あんたという人は、なにをやらせても、満足にできないじゃないの。すこしはがんばって、おかあさんをびつくりさせてちょうだいよ」

母は秀一に「いわれないでも、しっかり勉強してびつくりさせてみる」といったのである。

——^⑤そんなことができるぐらいなら、おれだって、こんなくろうはしないよ——^⑥

母は兄や姉たちが小学生のとき、夏休みにはどれほど勉強したかをいいだした。と、そのとき、玄関で人声がした。集金人でもきたのだろう。

「はあい！」

母はあわててへやをでていった。

「びつくりしたいって、そんなにびつくりしたければびつくりさせてやらあ！」^⑥

秀一はひとりごとをいった。

「あら、秀ちゃんにそんなことができるかしら？」

マユミがおもしろそうにのぞきこんだ。

「いっとくけど、ヘビや毛虫をふりまわしてびつくりさせても意味ないわよ」

「わかってらあ！ そのうちに、びつくりどつてんとでんぐりげえしてやらあ」

「どうやって」

「ふん！ こんなうちなんか、おつとびだしちまうのよ」

「とびだして、どうやってごはんをたべるつもり？」

「……ま、どこかで、宝ものでもみつけるさ」

「わりかし、つまんないことを考えてるのねえ。秀ちゃんらしくていいかもよ。でも、六年生になったんだから、もうすこしまともなことを考えたほうがいいんじゃないかしら」

マユミはこばかにしたように、小鼻のあたりで、ひこひこわらつてみせた。まったく、A。

「そんなこといったってな、おれが家をとびだせば、みんなあわてるさ。なにしろ、^⑦このごろは^⑧蒸発がはやってるんだからな。おふくろなんて、あんなにぎやあぎやあいってたつて、^⑨あおくなつてけいさつへなきこんじゃつて、大さわぎするにきまつてるさ」

「^⑦さあ、どうかしら？ ためしにやってみたら？」

マユミはおもしろはんぶん、けしかけた。

「ふん！ ためしじゃなくて、ほんとにやってやらあ。おれはずうつとまえから、考えていたんだ」といったぐあいに、秀一は自分から、計画をしゃべってしまったのである。そのあとで、秀一は「へしまった！」と思った。こんなことはマユミにいふべきことではなかったのだ。他人さまからききこんでいても、母につげ口するマユミにちよくせついうことは、面とむかつて母にいうのとおなじである。

「ふん、どうせまた、おふくろにつげ口するんだろう」

「そうねえ。^⑧おやつを半分よこしたら、考えてもいいわ」

マユミはなかなかめつい。おやつを半分もらえさせたいにしゃべらないというのではない。おやつを半分せしめたところで、あらためて考えてやってもいいというのだ。

とにかく、マユミにきかれてしまったら、どんなにじゅう¹⁰だいな秘密でも、秘密ではなくなってしまうのである。秘密はまるでなんでもないわらい話になって、白日^{はくじつ}のもとにさらけだされてしまうのである。

いくら秀一がぬ^⑨けているといつても、そんなマユミに、貴重なおやつを半分も、やる気になかなれない。いや、もしかすると、そのおやつそのものが、もらえなくなるかもしれないのであった。

「へん！ いいたきや、いくらでもいえよ。かつてにお題目^{だいもく}みたいに大声でどなつてあるくがいいや」

マユミはそんなばかしいことはしないとはいわなかった。

「ええ、もちろん、そうさせてもらうつもりよ。お気のどくさま」^⑩

マユミには秀一がなにを考えているのか、手にとるようにわかつてしまふらしい。秀一はにくらしそうにマユミをにらんだ。だが、にらんだぐらいでは、いたくもかゆくもない。^⑪マユミはすずしい顔をしていた。反対に秀一の腹の中は煮えくりかえらんばかりであった。

受験番号
氏 名

一、 1～10のひらがなは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。(送りがなも書くこと)

5	4	3	2	1
さいちゅう	のうりつ	じゅぎょう	じょうたい	せいせき
10	9	8	7	6
じゅうだい	ちよくせつ	けいさつ	蒸発	くろう

二、 ア～ウの意味を書きなさい。

ウ	イ	ア
面とむかつて	かんべんする	うんざりする

三、 a・bのことばを使って短文を作りなさい。

a	b
すっかり	知らず知らず

四、次の問いに答えなさい。

問 1 ―― ①「地獄のような夏休み」とありますが、どうしてそのように言えるのですか。説明しなさい。

問 2 ―― ②「秀一の足は、まるで鉛のくつでもはかされたようにおもったるかった」という表現は、秀一のだ
のような気持ちを表していますか。

問 3 ―― ③「問題集とにらめっこ」しているときの秀一の様子を説明している部分を十二字で抜き出しなさい。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問 4

a

く

d

 にあてはまる語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア とたんに イ うっかりと ウ てつきり エ まったく オ どうせ

a		b		c		d	
---	--	---	--	---	--	---	--

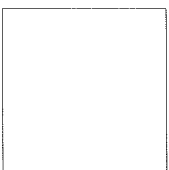
問 5 ―― ④「どうして、おれはこうまぬけにできてるのかなあ」とありますが、いすからころげおちたあとの
秀一について、どんなところが「まぬけ」だったといえるのですか。

問 6 ——— ⑤「そんなこと」とはどんなことですか。具体的に説明しなさい。

問 7 ——— ⑥「そんなにびっくりしたければびっくりさせてやらあ！」とありますが、秀一はどうやってびっくりさせてやろうと思ったのですか。

問 8 A にあてはまる文を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア これではどっちの言い分が正しいのかわからない。
イ これではどっちに転んでもうまくいかないだろう。
ウ これではどっちもどっちのただの口げんかである。
エ これではどっちが兄で、どっちが妹かわからない。



問 9 ——— ⑦「さあ、どうかしら？ ためしにやってみたら？」とありますが、この時のマユミの考えを説明しなさい。

問 10 ——— ⑧「おやつを半分よこしたら、考えてもいいわ」とありますが、どのようなことを「考えてもいい」と言っているのですか。

問11 ——— ⑨「そんなマユミに、貴重なおやつを半分も、やる気になんかなれない」のはなぜだと考えられますか。

問12 ——— ⑩「ええ、もちろん、そうさせてもらうつもりよ。」というマユミのことばから、マユミは秀一のどんな考えがわかっていたと考えられますか。

問13 ——— ⑪「いたくもかゆくもない」とありますが、だれの、どのような様子をいつているのですか。